

趙之謙と多胡碑

―日・朝・清の文化交流史の視点から―

Zhao Zhiqian and the Tago Stele : From a Viewpoint of the History of Cultural Interchange Among Japan, Korea, and Qing

大橋 修 一

OHASHI Shuichi

はじめに

趙之謙の作品を収めた書籍の一つに『二金蝶堂遺墨』がある。そこには日本の古碑の一つとして知られる『多胡碑』の臨書作品が収録されている。⁽¹⁾ また、彼が三十六歳の時に沈均初、胡菱甫、魏稼孫、方可中などと協力し、古碑刻を整理した『補寰宇訪碑録』(以下『訪碑録』と略称)にも「日本國片罡緑野甘良三郡題名残碑」、すなわち多胡碑が収録されている。(図2) したがって、この『訪碑録』の拓本収集をもとに臨書したことは容易に推測される。『訪碑録』にはほか異国の石刻として、高麗慶尚道の「錦山摩崖」、高麗晋州の「僧神行碑」、高麗長興の「寶林寺普照禪師碑」や出土地不明の「依止大師残碑」並びに「雙溪寺真鑑禪師碑」など二十数種

が収められている。朝鮮の多くの古碑が収録された『訪碑録』ではあるが、趙之謙が日本の多胡碑にのみに着目し、臨書したのも日本との不思議な墨縁が感じられる。

ところで、筆者の主たる興味は、この多胡碑がどのような経路で清国に伝播し、さらに趙之謙の入手に至ったのか、その点について検証を加えてみたいのである。さらに彼が多胡碑を臨書した、その精神的背景といったものにもすこしく触れてみたい。

(一) 朝鮮通信使と日本人

多胡碑の伝播については実のところ朝鮮通信使の役割が大きい。朝鮮通信使の日本訪問は幕府当局はもちろんのこと、諸大名をはじめ町人や百姓にいたるまで、当時、異常な関心を寄せていた。⁽²⁾ とり

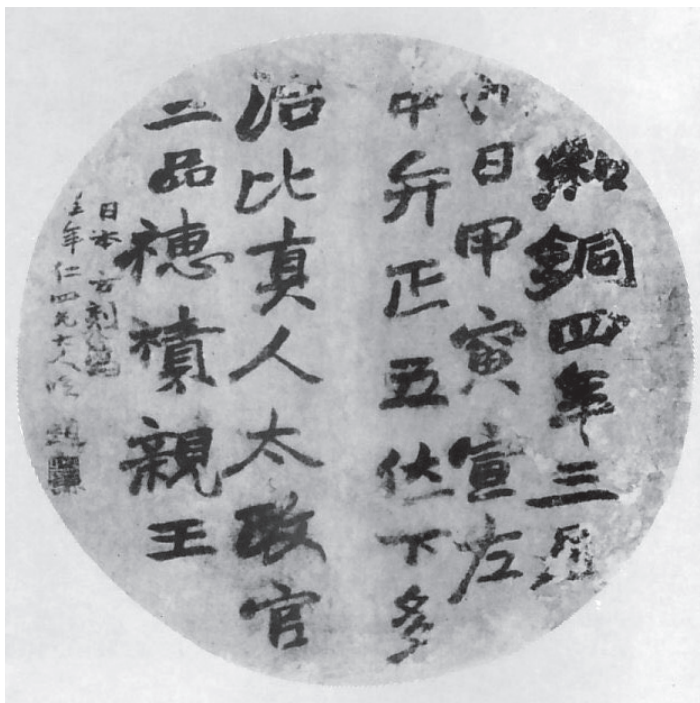


图1 趙之謙 臨多胡碑 团扇

<p>蕭為男和晦造象 <small>正書 神龍二年</small></p> <p>直隸磁州</p>	<p>程修意造象 <small>正書 神龍二年</small></p> <p>直隸磁州</p>	<p>楊氏合葬殘碑 <small>正書 神龍三年七月</small></p> <p>陝西長安</p>	<p>梁嘉運墓志 <small>正書 景龍三年十月</small></p> <p>湖北襄陽</p>	<p>秦州都督府口顏瑤墓志 <small>正書 景龍四年四月</small></p> <p>陝西咸陽</p>	<p>秦軍趙踐冰墓志 <small>正書 景雲二年正月口一日</small></p> <p>直隸晉州</p>	<p>陸元感墓志 <small>正書 景雲二年</small></p> <p>江蘇崑山</p>	<p>僧九定造浮圖記 <small>正書 景雲二年</small></p> <p>山東滋陽</p>	<p>但大娘造象 <small>正書 景雲二年</small></p> <p>直隸磁州</p>	<p>吳四妹造象 <small>正書 景雲二年</small></p> <p>直隸磁州</p>	<p>日本國片野甘良三郡題名殘碑 <small>正書 和銅四年三月九日甲寅 政為景雲二年辛亥 舊題多胡部 碑傳為日本入事 麟得之土中 後藏朝 辨成氏家 湖北漢陽 葉氏墓</small></p>	<p>弟子口法 <small>正書 大極元年</small></p> <p>直隸磁州</p>	<p>殘造象 <small>正書 先天元年</small></p> <p>直隸磁州</p>	<p>慕容元等造象 <small>正書 先天二年</small></p> <p>直隸定州</p>	<p>郭正禮等造象 <small>正書 先天二年</small></p> <p>直隸定州</p>	<p>李石頭妻造弥勒象 <small>正書 先天二年八月廿六日</small></p> <p>直隸定州</p>
---	---	--	---	--	--	---	---	---	---	--	--	---	--	--	---

图2 補寰宇訪碑錄

わけ日本の儒者文人たちは、韓使との接触や交流を終身の榮譽として、通信使が入国するたびに沿道の客館に馳せ参じ、競って面談を求め、筆談と詩文の唱和、また書画の揮毫を請い、中国や朝鮮の政情をさぐり、経・史・諸学の問答をかわすのが通例となっていた。ここでは明和元年（一七六四）第十大將軍家治の襲職賀使として訪日した書記官、成大中と日本の文人、韓天寿^③（一七三二～一七九六）や沢田東江^④（一七三二～一七九六）との交流からみてみよう。

明和元年の通信使の訪日は、第一回目の慶長十二年（一六〇七）から数えて十一回目にあたる。明和の通信使の正使は趙暉（一七一九～一七七七）である。官は慶尚監司から礼曹参議になった。著に『海槎日誌』がある。ここで取り上げる書記官、成大中（一七三二～一八一二）は字を士執、青城と号した。時に三十三歳、一行中でもっとも文名を馳せた学士である。

訪日中に記録した『槎上記』の著があり、また成大中には通信したちの日本紀行を集めた『海行摺載』の編者としても知られる。成大中の『日本録』（槎上記）『大系朝鮮通信使』巻七所収）三月十一日の条によると、ここではじめて、成大中は沢田東江と韓天寿に出会っている。

三月十一日発回程宿品川、江戸儒生木貞貫、渋井平、今井兼規、

山岸蔵、源成範、千葉立之、黄彦明、山田方、関修齡、平鱗、平英、韓天寿来別、兼規贖扇一、鱗贖印章二、天寿贖筆三、各以紙筆謝之。

とある。平鱗は、沢田東江のことである。東江は別れに際して自刻印二章を成大中に送り、韓天寿は筆三本を送ったのである。通信使一行が江戸をたつて品川の客館についたとき、沢田東江に伴われて、韓天寿も客館を訪れたのである。韓天寿は感激したのか再び翌日に成大中に遭いに outward に出向いている。成大中の『槎上記』にも、この再会が記録されていて、

三月十二日宿藤沢、韓天寿、平英昌雨追来酒涕而別。とあり、さらに四月九日には

周公送馬蹄鏡一、筆十二、西翼送墨十笏、韓天寿因木世肅致書送嶧山、華山二碑搨

とある、韓天寿はさらに木世肅にたのんで、嶧山碑、西嶽崑山廟碑の双鉤本を送っている。

沢田東江も通信使との交遊を記録した『傾蓋集』に

前日所呈嶧山碑、葉有道碑搨做於宝晋齋帖、……伏冀足下憐察之、齋婦而列貴芸圃之林則永伝墨宝於両東也、何幸如之。とあり、韓天寿の双鉤本を朝鮮の芸林にも広めて欲しい旨が記されている（李元植の『朝鮮通信使の研究』にも所載）。

この記述から、嶧山碑双鉤本が朝鮮に伝わったことは推測される

のだが、さらに韓天寿が刻した双鉤本は清にも伝播した様子が窺える。藤塚鄰氏の『清朝文化東傳の研究』は、朝鮮におけるうずもれた研究資料をもとに、専ら清朝の経学が朝鮮にどのように伝播したのかを解明した名著であるが、この著に朝鮮の金正喜から清国の翁方綱に嶧山碑を寄贈した記事が見える。金正喜は、字は元春、阮堂と号した。朝鮮における清朝学の第一人者である。翁方綱は言うまでもなく学会の巨頭であり、金石学の大家でもある。金正喜は嘉慶四年（一八〇九）に清国に入燕し、翌年翁方綱と子弟の関係を結んだ。また翁方綱の弟子、葉志詵（翁方綱の甥）、さらに葉志詵の無二の親友劉喜海とも金石の交りを結んだ。ちなみに葉志詵には『平安館金石文字七種』、また類書のない『高麗碑全文』を著し、朝鮮金石文界の第一人者である。一方劉喜海は、山東の名族出身で劉墉の孫にあたる。著に『海東金石苑』八巻がある。朝鮮の燕行使に随行した金正喜から翁方綱に贈られ、翁方綱は、これを喜び、『跋嶧山碑』（『復初齋文集』巻二十）に

右嶧山碑日本朝鮮進士金秋史（正喜）寄贈日本国

といい、また「右嶧山碑日本」と題して、長詩を賦した。その首句に

嶧山秦碑日本刻、謂出棗木肥前、棗木之刻誰所作、杜公初擬

孤嶧巔

とある。また『清朝文化東傳の研究』によると、葉志詵にも道光十四年（一八三四）に嶧山碑を送った記事が見える。

前寄蘇齋重模嶧山碑、曾經入目、今不知何往矣
といい、少なくとも二本の嶧山碑が金正喜から二人に寄贈されたことが確認できる。韓天寿が双鉤した嶧山碑が、朝鮮を経て、清国にもたらされたのである。

一方、沢田東江も「多胡碑」の双鉤本を成大中に渡し、これが嶧山碑と同様、清国にもたらされているのである。この点についていち早く述べられたのは杉仁氏である。杉氏は著者の指摘した前書『清朝文化東傳の研究』と併せて、自らの韓国の現地調査を試みられ、独自のルートで多胡碑伝播の経路を論じておられる。⁶⁾ただし、筆者の多胡碑伝播の経緯とは見解を異にするので論証を加えておく。ところで成大中の『槎上記』に記載はなく、かれの文集『青城集』（早稲田大学図書館蔵）に

書多胡碑

多胡碑余得之日本。其稱和銅迺其元明天皇年號。其四年則唐睿宗景雲二年辛亥而距今一千一百九十年也。碑之淪於野土不知其幾年而平鱗者始得之、鱗雅善金石圖章、獲此以為珍好事者、亦盛為稱此余之入日本鱗以此見遺。欲廣此傳、然余以其字畫之太

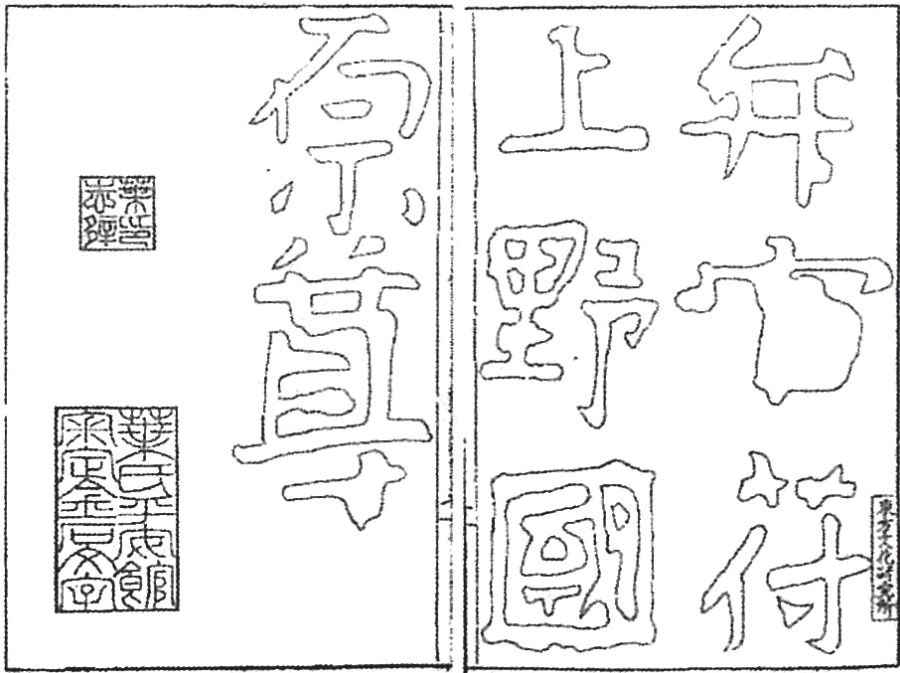


図3 「日本残碑双鉤本」(葉志誥輯『平安館金石文字七種』所収)

詭藏之中筭、未輒示人。人亦不之好也。適芝溪宋徳文見而奇之。曰。漢隸古法也。中國之失其傳久矣。

とある。(早稲田大学講師、杉仁氏の教示による。)

文章からみると東江は、この「多胡碑」を広める意図のもとに成大中に寄贈したことがわかる。^(?)しかし、成大中はこの多胡碑の字画が肉太いのをあやしみ、人に示すこともなく筭の奥にしまっておいた。訪日日誌『槎上記』に記録しなかったのはそのためであろう。これを芝溪宋徳文が見て、「漢隸の古法」と気づいたのである。成大中の秘蔵と芝溪宋徳文の再々発見がなければ、清国の金石書には載録されなかった。

まず葉志誥の『日本残碑双鉤本』(平安館金石文字七種)に

(A) 書勢雄偉、類上皇山樵瘞鶴銘字、相伝日本人平鱗得於土中。

拓本流入朝鮮為成氏所蔵、廿年前翁方綱師以双鉤本見貽。偶

爾檢得因詳、為攷証並重摸、以広墨縁、道光十有九年歲在亥

夏六月望日 漢陽 葉志誥 識

(京都大学人文科学研究所図書館蔵)

とある。(図3)この文章によると、日本人平鱗が土中から多胡碑を発見し、朝鮮の成大中に寄贈したこと、二十年前にこの多胡碑の双鉤本を師の翁方綱から贈られたことが記されている。ほか『清朝

文化東傳の研究』にも「多胡碑」についてふれている記事が見える。

この記載によると、道光十四年（一八三四）友人の金正喜から葉志誥は多胡碑を寄贈され、これを感じ、その謝礼の手紙のあとに多胡碑について、

多胡碑、會見李游荷以双鉤本寄劉燕庭、今得此冊、此愜願也といっている。整理すると、葉志誥は、①金正喜から寄贈された多胡碑一本。②師の翁方綱から寄贈された多胡碑一本、③劉喜海所蔵の一本、つまり三本の多胡碑を見ていることになる。

その後の金石書は、葉志誥の著した『日本残碑双鉤本』をそのまま踏襲し、記録したものと考えられるが、葉昌熾の『語石』のみは劉喜海の『海東金石苑』を採録しているようである。なお趙秉龜が日本に訪日した記録はない。以下列記してみると以下のとおりである。

- (B) 三郡題名残碑 和銅四年三月九日甲寅 攷為景雲二年辛亥舊題多胡郡碑伝為日本人平鱗得之土中後蔵朝鮮成氏 湖北漢陽 葉氏拓本。

楊守敬『楷法溯源』卷一 目錄

- (C) 日本国片罡緑野甘良三郡題名残碑 正書和銅四年三月

九日甲寅。攷為景雲二年辛亥、旧題多胡郡碑伝為日本人平鱗得之土中。後蔵朝鮮成氏。字雄偉類瘞鶴銘。湖北漢陽葉氏模本。

趙之謙『補寰宇訪碑録』

- (D) : 此碑曾流传中国、葉氏双鉤本翁氏方綱跋云、可興焦山瘞鶴銘並時誠重也。

傅雲龍『日本金石志』

- (E) 考景雲二年辛亥、旧題多胡郡碑。伝為日本人平鱗得之土中。後蔵朝鮮成氏。余所見係湖北漢陽葉氏模本。書法雄古、顔魯公近之。

楊守敬『激素飛清閣平碑記』卷三

- (F) 東武録麗碑 畢付録日本石刻四通。惟多賀(胡)郡一碑、有朝鮮趙秉龜跋。尚是秉龜、奉使扶桑、攜至中土者、其難得可知。覃溪(翁方綱)以多賀(胡)郡碑与瘞鶴銘並重称 為日本残碑、实未残也…。

葉昌熾『語石』卷二

ところで沢田東江から成大中に送られた多胡碑が、どのような経

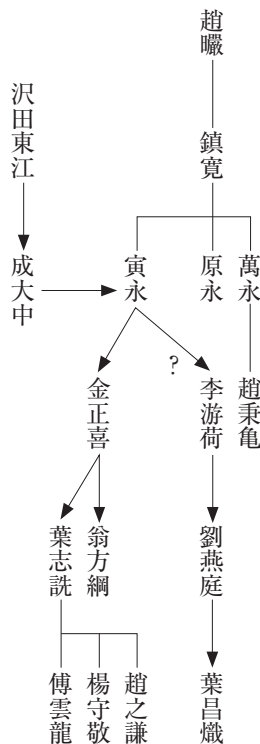
路で金正喜が入手し、翁方綱や弟子の葉志詵に寄贈されたのか、これについては次のような事が考えられる。⁽⁸⁾

明和の通信使の正使は先述した趙曠であった。其の書記官が成大中であった。その後も趙氏の子孫と成大中は親しく交わりをもっており、孫の趙寅永（号は雲石）は、成大中の文集「青城集」に序を寄せている。また自分もつとも教えを受けたのは、成大中であるとも述べている。この趙寅永は、朝鮮の金石研究家の第一人者であり、また劉燕庭の『海東金石苑』八巻は、趙寅永から贈られた朝鮮古碑拓本が中心になって完成したものである。趙寅永には、『海東金石存考』の著もある。おそらく成大中はこの金石研究家の趙寅永に「多胡碑」を寄贈したものとされる。趙寅永は多胡碑の双鉤本からさらに数部の双鉤本を作製した。これを清国奉使の金正喜にたくし、さらに『青城集』に記載された多胡碑がもたらされた事の顛末の話聞かせたのであろう。また趙寅永と金正喜は、純祖十九年文科登第した同年生で金石の交わりを通じて深く結びついていた。金正喜は嘉慶十四年（一八〇九）に父金西堂に随行し、翁方綱の弟子となり、日本の古碑である多胡碑を寄贈した。後葉志詵にも送付したものは双鉤からさらに双鉤されたものかもしれない。李游荷が劉燕庭に送った多胡碑双鉤本はどういう経路で清国に持ち込まれたのか。これは不明であるが、劉燕庭は『海東金石苑』の巻尾に『日

本国多胡郡碑』として著録しているので、これが李游荷から贈られた多胡碑双鉤本と思われる。⁽⁹⁾

以上を整理し、図解すると次の如くである。

〔多胡碑〕伝播経路図



日本からもたらされた「多胡碑」は朝鮮からさらに清国に招来され、種々の金石書に記録された。金石書の中でも楊守敬は『楷法溯源』『激素飛清閣平碑記』の二書に記録した。『楷法溯源』中国・朝鮮・日本の碑文を収録した全集で大部分は中国の古碑から採字しているが、朝鮮から三十余碑、日本からは多胡碑の三十九字が「唐之部」に採録された。楊守敬の明治書道界に革新をもたらした功績は周知の時事であるが、楊守敬の著録によって、さらに明治末期には黒板勝海の『日本金石銘表』、亀田一怒『皇朝金石年表』、奥田一夫『日本金石年表』、佐野英山『国分日本金石年表』などの

金石書に収録された。中国の金石学者から多胡碑の情報が逆輸入されたことで、多胡碑が日本において再評価され、さらに趙之謙の臨書作品を再注目することになった次第である。

次に趙之謙が、この日本国の多胡碑のみに着目し、臨書したその真意についてである。が、確たる証拠は見いだせない。しかし趙が採録した「日本残字双鈎本」(『平安館金石文字七種』)の跋に「書勢雄偉、類上皇山樵瘞鶴銘字」とあるが、その文言に触発されたものと思われる。この瘞鶴銘は、宋代以来の著録の上でも最もやかましいものである。さらに詳細な考証を加えたのが、葉志詠の師の翁方綱の『瘞鶴銘攷補』である。ただし、この銘の書撰者を確定すべき証拠は見あたらないが、かれの著「蘇齋筆記」(『碑刻』卷一五)^⑩に瘞鶴銘を評して「篆法、隸法を兼ねているし、虜世南・歐陽詢の筆法には、みなこれがそなわっている」といい、高い評価を与えてい



図4 趙之謙 瘞鶴銘

る。翁の弟子である葉志詠が、瘞鶴銘と多胡碑が、「書勢雄偉」る点で、同類だと評したのではあるが、推則を加えれば、翁方綱に聞いた伝聞をそのまま借用し、使用したのかもしれない。趙之謙も翁方綱の瘞鶴銘に対する深い洞察は、書物によって熟知していた。したがってその翁や葉氏が高い評価を下す瘞鶴銘と同類の「多胡碑」を是非とも臨書し、その雄偉な中に宿る篆隸の古法を探り出したい衝動にかられたのかもしれない。趙之謙も瘞鶴銘そのものにも着目して「悲盦贖墨」にも宋拓の瘞鶴銘を臨書した作品が収録されている。(図4) もう一つの動因として、趙之謙の多胡碑の臨書作品は、同治七年(一八六八)に書かれたものである。その前年六年(一八六七)、孫熹にあてた書簡(『同治期の趙之謙』『金石書学』No.6)に鄒濤氏が訳した中に「今は身も心も鄭道昭を追求している。鄭道昭は漢以降の第一人者である。幸いにその良さがよく分かった」とある。かれの鄭道昭に対する心酔ぶりは

「二金蝶堂遺墨」に「白駒谷題字」、「墨」(二六三号)には「鄭義下碑」の臨書作品が収められていることよって窺われる。(図5) 憶測を加えれば鄭道昭の筆意で、この「書勢雄偉」な大字の多胡碑を実験的に臨書してみればどうなるのか、鄭義下

碑のとりわけ左払いの臨書作品などには多胡碑の臨書と一脈通ずる筆意を見出すことができようと思われる。これらいずれかの精神的な動因によって多胡碑の臨書作品が誕生し、趙本人の書道史観や芸術観が暗々裡にあるいは顕然と働いていたのではなかったか。

〔注〕

- (1) 西川寧「多胡碑余談」『西川寧著作集』第三巻
- (2) 通信使については辛基秀、仲尾宏編『大系朝鮮通信使』全八巻李元植『朝鮮通信使の研究』思文閣出版 一九九七年。辛基秀『朝鮮通信使』明石書店一九九九年。池田温『東アジアの文化交流』吉川弘文館二〇〇二年。石阪孝二郎編『朝鮮通信使来朝帰帆官録』明石書店一九九二年。上田正昭『朝鮮通信使とその時代』明石書店。二〇〇一年参照。
- (3) 米田弥太郎『韓天寿とその刻碑』『近世書道史論考』柳原書店一九九一年。上村泰昭『韓天寿』綜芸舎一九九一年。大橋修一『韓天寿とその時代』『字典』十号 字典舎二〇〇二年。
- (4) 米田弥太郎『沢田東江の古法書説』『近世書道史論考』柳原書店一九九一年。
- (5) 辛基秀・仲尾宏編『大系朝鮮通信使』第七巻所収一六六～一九七頁。
- (6) 杉仁『在村文化の情報発信と朝鮮・中国』『近世の地域と在村文化』吉川弘文館 二〇〇一年。
- (7) 沢田東江『上毛多胡郡古碑の話』『日本書論集成』巻三
多胡碑は最初、道斎（二七一八～一七九四）名は克明が発見し、沢田東江に伝えられた。著に『上毛多胡郡碑帖』があり、東江が跋を加えている。
- (8) 杉仁氏は多胡碑伝播のルートを趙秉龜から葉志誥に渡されたと論証されており。詳細は前書『在村文化の情報発信と朝鮮・中国』『近世の地域と在村文化』。また杉村邦彦「多胡碑の朝鮮・中国への流伝について」『古代多胡碑と東アジア』において氏は、筆者の「日・朝・清文物交流史の一断面」(『全国大学書道学会会編』)を参考に立論されている。
- (9) 劉燕庭『海東金石苑』は『石刻史料新編』二三集には『日本国多胡郡碑』としては採録されていない。『朝鮮文化東傳の研究』に指摘の本とは別書と思われる。
- (10) 西林昭一『翁方綱の書学』(柳原書店)参照。